

小唄を用いた日本語授業の実践と教師の内省

—ベルギーの大学におけるオンラインでの体験型学習—

小熊利江（ゲント大学・お茶の水女子大学）

rieoguma@hotmail.com

高木三知子（ブラッセル日本人学校補習授業校）

mtakagi59@gmail.com

【要約】

ゲント大学では日本語の授業に小唄の学習を取り入れる試みを行った。小唄授業は3回にわたりオンラインにて実施された。授業内容として主に落語に関する知識の導入、小唄演技の注意点等の指導を行い、最後に学生は自分の選んだ小唄を演技してビデオ撮影した。授業後、教師は自身の授業ビデオを見ながら内省した。今後の改善案として、学生の主体的活動であるグループワークや演技指導、小唄を楽しむ活動に焦点を当てることが挙げられた。

1. はじめに

2020年10月に、筆者の1人である高木は国際交流基金ロンドン日本文化センター主催のオンライン研修会「教師のための小唄ワークショップ—学習者による小唄パフォーマンスの指導方法—」⁽¹⁾（以下、「ワークショップ」とする）に参加した。ワークショップでは小唄を覚え、他の参加者の前で演じる体験をした後、日本語学習者2人に実際に小唄を指導してその演技をビデオに撮って提出するという課題が与えられた。しかし当時、高木は日本語教育を行う現場を持っておらず、小唄を演じてもらう学習者がいなかったため、もう1人の筆者であるゲント大学の小熊に相談した。小熊は小唄が日本文化の学習になり、まとまった内容のある話を暗記することで日本語の学習にもなるなど、一定の教育的効果があると認めた。また、ゲント大学では新型コロナウイルスのパンデミック禍により2020年春から日本留学がキャンセルされている上に授業がオンライン化され、学生の学習意欲が下がることが危惧されていた。小熊は留学できない学生のために何か特別な授業内容を導入したいと考え、日本語のコースに小唄の学習を取り入れることにした。

このように小唄を用いた日本語授業（以下、「小唄授業」とする）実践のきっかけは、ワークショップの事後課題の達成のためであった。しかしそれだけではなく、高木はワークショップ講師の次の言葉に感銘を受け、日本語学習者に小唄を指導してみたいと思っていた。「学習者は小唄を演じることで、単に日本文化や言語の知識を増やすだけではなく、表現することの喜びや創造性を楽しむと感じていく」、「例えば日本人の前で小唄が演じられたら、人間関係やコミュニケーションがうまくいくきっかけになる」。世界がパンデミックで暗い時期に、ワークショップでは久しぶりに皆で笑うことができ、その楽しさをベルギーの日本語学習者にも味わってほしいという思いも小唄授業への原動力となった。

一方で、ワークショップ参加者のうち有志 5 人によって、日本語学習者の演じる小噺を発表する場を設けるためにオンラインで国際小噺合同発表会が開催されることとなった。学生の参加は任意であるが、高木はゲント大学の学生全員を国際小噺合同発表会に参加させるという目標を掲げ、授業の内容を計画した。本稿ではこのような経緯で行われた、小噺授業の実践について詳細に報告する。

2. 小噺を用いた授業実践の概要

2021 年に、ゲント大学文哲学部の日本学専攻において小熊の担当する「現代日本語 VI」コース内で、小噺授業の実践を行うことになった。コースの授業の一部を下記の日程で 3 回にわたり、それぞれ 30-40 分間小噺の学習に充てることにした。学習の到達目標は、学生が小噺の内容や演技の仕方を理解し、実際に小噺を演じてビデオ撮影することと設定した。さらに最終的に、学生が国際小噺合同発表会に参加することも視野に入れた。

小噺授業は、外部からの授業者として高木が実施した。1 回目の授業は 40 分、2 回目と 3 回目の授業は各 30 分の予定であったが、実際には 2 回目と 3 回目は 5-15 分の時間超過となった。実践の概要は、以下の通りである。

対象学生： ゲント大学日本学専攻の 3 年生⁽²⁾

参加人数： 14 人⁽³⁾

日本語能力：CEFR の B1 レベル修了程度

授業日程： 学部 3 年次後期（2021 年 2 月-7 月）のうち、以下の 3 回

① 2021 年 3 月 5 日（金）13:40-14:20（約 40 分）

② 2021 年 3 月 12 日（金）13:50-14:25（約 35 分）

③ 2021 年 3 月 26 日（金）13:50-14:35（約 45 分）

授業形態： オンライン

尚、大学の規定により、オンライン授業は録画されることになっている。授業のビデオは、授業後に大学の学習サイト上で 1 週間公開し、学生が閲覧できるようにした。また毎回の授業で用いたスライドも、授業後に大学の学習サイトにアップロードして学生が自由に閲覧できるようにした。

3. 授業の具体的な内容

筆者 2 人が事前に何度も話し合いを行い、3 回の授業内容を入念に計画した。さらに、各授業後に 2 人でふり返りを行って次回の授業内容を話し合い、修正しながら実践を行った。学生に紹介する小噺の題材として、ワークショップで紹介された『みんなの小噺プロジェクト』のウェブサイトからダウンロードした「日本語学習者用小噺集」（畑佐 2018）を使用することにした。

3.1 事前課題

短い時間で効率よく授業を進めるため、反転授業の手法を採り入れ事前課題を設定することにした。「日本語学習者用小噺集」に収められている小噺 52 の演目のうち、始めの 10 題を読んでくることを授業前の課題とした。

3.2 1 回目の授業

まず、授業者である高木は自身の小噺の実演ビデオを学生に見せて、小噺について導入を行った。

小噺とは「落語をミニマライズした形の短い笑い話」であると伝えるとともに、計画中の国際小噺合同発表会への参加を呼びかけた。

大学の授業の一環であることを考慮し、初回の授業では小噺に関する背景知識を多く導入した。落語の祖と呼ばれる安楽庵策伝（1554-1642）を紹介し、彼が70歳の時に完成させた説教話材料集『醒睡笑』全8巻に収められている以下の話を読んで説明した。

小僧が、夜更けに長い棹を持ち、庭の中をあちらこちらと振り回している。坊主がこれを見つけ、
「何をやっているのだ。」とたずねた。
「空の星が欲しくて、打ち落とそうとするが落ちない。」
「さてもさても鈍な奴だ。そのように工夫が無くてどうするのか。そこからでは棹が届くまい。屋根へあがれ。」

次に、事前課題であった10の小噺を1つ1つ読み、クラス全体で内容の理解を確認した。最後に、次回までの宿題として、「日本語学習者用小噺集」（2018）に収められている52の演目から好きな小噺を1つ選んで、覚えてくることを課した。

3.3 2回目の授業

2回目の授業では始めに、ワークショップにて紹介された、小噺の発表時の注意点を4つ導入した。それは、①言葉をしっかり覚える、②大きい声で話す、③発音に気をつける、④落ち着いてゆっくり話す、の4点である。これらの注意点を確認しながら、覚えてきた小噺を学生に1人ずつ発表させた。

次に、話を効果的にするポイントを4点、図や写真などを用いて説明した。それらは、(a)視線を止める、(b)上下を切る、(c)扇子と手ぬぐいを上手く使う、(d)創造性を働かせる、ことである。特に、(b)上下を切ることについては、(独)日本文化芸術振興会の「落語早わかり」のウェブサイトの絵をスライドで示しながら、客席から見て右側が上手で左側が下手であること、建物の入口は常に下手にあり家の中にいる人は上手にいることになること、また落語家が舞台の下手の方に顔を向けているときは立場が上の人役を演じていること、など動作を交えて詳しく説明した。それは日本の伝統的な歌舞伎、能の舞台など全てに共通している決まりごとであり、落語では1人で何役も演じ分けなければならないので重要であると伝えた。また、(c)扇子と手ぬぐいについては、柳家東三楼による「RAKUGO in English」のウェブサイトの動画を見せながら、使い方の確認をした。

さらに、座布団に座って演じることや、浴衣や着物、それに代わるものを着て演じることで見栄えが良くなることを伝えた。次回までの宿題として、自分の選んだ小噺を演じ、ビデオに撮ってオンライン上で提出することを課した。

3.4 3回目の授業

3回目の授業における当初の授業計画は、以下の通りであった。

- (1) お辞儀、出囃子の紹介
- (2) 発表時の注意点4点の確認
- (3) 話を効果的にするポイント4点の確認
- (4) 学生が提出した小噺ビデオを皆で鑑賞しながら、個々の学生にフィードバック

(5) 学生が4つの小グループに分かれて演技をブラッシュアップ

4つの小グループの中心的な練習内容は、それぞれ①発音に気をつけること(4人)、②登場人物のキャラクターを深めること(3人)、③演技・仕草を改善すること(3人)、④視線に気をつけること(4人)と設定された。

しかし3回目が最後の小噺授業であるため、学生に多くの小噺の知識を伝えたいという気持ちが授業者に現れ、当初の授業計画に加え直前に、落語業界や階級制度、出囃子についての情報などを盛り込んだ。その結果、これらの内容の紹介に時間がかかり、授業が予定時間を超えたため、(4)学生の小噺ビデオを鑑賞しながら個々にフィードバックを与える活動の際に、授業者のフィードバックが早口になり学生に理解しづらくなった。また、(5)のグループワークの活動は時間がなくなり、全く行うことができなかった。

4. 学生の小噺演技

14人の学生は全員、小噺を演技する課題を行い、学習目標であったビデオ撮影を達成した。ビデオ提出時には、14人中4人の学生が着物や法被、それに代わるものを羽織るなど装いに工夫を凝らしていた。また全員、座布団のような物に正座して、演技をしていた。扇子と手ぬぐいのない学生は、台所の布巾などを小道具として代用していた。学生たちの小噺ビデオは、教師が期待していたレベルより高い作品が多く、学生が熱心に取り組んだ様子が見られた。

学生の選んだ小噺は多岐にわたったが、複数(2人)の学生が選んだ、つまり人気のあった小噺が3題あった。それらを以下に紹介する。特に、『おかげさまで』と『神様』の2つの演目は、日本語学習に関係する内容で、学生自身が登場人物に共感したために選ばれたのではないかと考えられる。

『おかげさまで』

先生 「まあ、ロバートさん、ひさしぶり。元気ですか。」

ロバート 「元気じゃないよ。」

先生 「ロバートさん、失礼ですよ。私はあなたの先生ですよ。『おかげさまで』と言わなくちやいけませんよ。」

ロバート 「おかげさまで、卒業できないんだよ。」

『神様』

学生 「神様、私の日本語を上手にしてください。」

神様 「何でも言うことを聞くか？」

学生 「はい、何でもします。」

神様 「勉強しろ。」

『ケンカの原因』

子供 「お巡りさん、助けてください、あそこで僕の父さんが男とけんかしているんです。」

警官 「よし分かった。……それで、どっちが君のお父さんだい？」

子供 「分かりません。それがけんかの原因なんです。」

その後、国際小唄合同発表会への参加要領が決まり、発表会に参加するためには演技の前後にお辞儀をすることと規定されたが⁽⁴⁾、学生のビデオにはお辞儀が収録されていなかった。そのため、授業者は学生に再度お辞儀を入れた小唄演技のビデオ撮影を依頼したが、大学では試験期間が近づいていたため、2回目のビデオを撮影して提出したのは6人にとどまった。

しかしながら、2回目のビデオ撮影をした学生の演技では、3回目の授業時のフィードバックが活かされており、登場人物のキャラクターが深められ演技が見直され、小道具の使い方や発音なども向上している様子が観察された。国際小唄合同発表会(KKGGH)のウェブサイトの「小唄動画 2021年」(2021)には、小唄を演じた学生の1人、イシによって撮影された2回目の小唄ビデオ「ケンカの原因」が、作品例として掲載されている。学生の具体的な成果物として、是非ウェブサイトの小唄ビデオを参照されたい。

5. 教師による授業のふり返り

3回の小唄授業の実施後、筆者2人は録画された授業のビデオを見ながら、ともに授業をふり返った。その際に小熊は、授業者である高木に内省を促す目的で半構造化インタビューを行った。以下に、授業者によるふり返りを具体的に記述し、小唄授業実践の良かった点や改善点などを探る。

5.1 授業の準備

小唄授業は、授業者自身がワークショップで小唄について学んだ直後に計画されたため、演技の注意点などをよく憶えており、授業準備の際に有利に働いたという。「ワークショップで受け取った資料がたくさんあったので、そこから授業内容を組み立てた。注意点などもそのまま教えれば良かった」と述べられたように、自身の持つ豊富な学習内容がそのまま授業の準備に活かされた。

一方で、授業者には小唄に関する体系的な知識が不足していたため、「自分も学びながら授業を準備する感じ」になり、「付け焼刃的な準備になってしまった」とふり返った。毎回の授業準備のため小唄や落語について調べ、学生に紹介するものを選ぶためにYouTubeで様々な落語のビデオを観て、説明のスライドを作るなど、1回30-40分の授業に7-8時間かけて準備をしたが、まだ時間が足りなかったと述べた。

2回目と3回目の授業は時間を超過し、予定していた学生への個別フィードバックや学生による主体的活動であるグループワークなどに充てる時間が不足した。その原因として、授業者自身が小唄を学びながら準備しているうちに小唄に対する興味が益々高まり、「いろいろ面白いことが多くて、学生に伝えるポイントが絞り込めなかった」結果、「授業にあれこれ盛り込みすぎてしまった」ことが挙げられる。準備をする段階で、各授業の学習目標を見失わないことが重要であると改めて認識された。

今回、授業者が授業計画の際に特に力を入れた点は、学生に演じる楽しさが伝わるようにすることであった。自身がワークショップで小唄演技を行った経験が楽しく、「学生にも授業を受けて楽しんでもらえたらと思った」。その一方で、大学の授業ということを意識し、日本文化の学習という要素も取り入れようと考え、落語の歴史や出囃子などの周知的な知識の導入も重視した。導入する内容をスライド上でわかりやすく示せるように、様々なウェブサイトから視覚情報を引用した。しかし、提示した資料は、結果的に「学生に紹介するだけで済ますものと、授業で説明するものについての区別がよく検討されていなかった」ことにより、周知的な細かい情報が多くなったことや、「紹介したウェブサイトの多くはpdfだったので、コンピュータの翻訳機能が使えないページが多かった」ことにより、学

生にとって理解が難しい内容になったことなどが、準備段階の反省点として挙げられた。

5.2 授業の運営

授業者は1回目の授業について、始めに「自分の実演ビデオを見せたことは学生が小唄を理解するうえで効果的だった」とふり返った。授業で小唄を10題読んだ際に、学生は小唄の内容を容易に理解できたようであった。2回目の授業も、学生による小唄の発表以外は講義的な内容が多かったが、絵や動画があったため学生は大体理解できたように見えた。しかし3回目の授業では、導入する内容が多く予定時間を大きく超過したため、授業者の話すスピードが速くなった。授業後に学生に行ったアンケート調査によると、授業者の話し方が速く未知の語彙も多かったため内容の理解が難しかったという意見が多く見られた。授業者は、「3年生の日本語能力がB2レベル⁽⁵⁾だと勘違いしていたので、かなり自然な日本語で話した」と理由を述べた。

このような誤解は、対面式の授業であれば学生の反応等によりその場で解消すると考えられる。しかしオンラインの授業においては、学生の顔が画面上に小さく映るのみで学生の反応が授業者に伝わりにくく、また学生側からもわからないことを積極的に示しにくい状態である。そのため、学生が理解できない部分を抱えたままになるという状況が起りやすと考えられる。授業者は、このようなオンライン授業における特徴について意識して授業を進めることが求められる。

3回目の授業ビデオを見ながらふり返りを行っていた際、学生の小唄演技ビデオを鑑賞した場面が表れた。授業者は、「学生の演技を見ながら、すぐにコメントした方がよかった。あとで説明するのではなく、演技の仕方はその場で関連付けて知識を導入していった方がよかった」とふり返った。このように、自分の授業の進め方を客観的に見て具体的な改善点に気づくことができるのは、授業ビデオを見ながらふり返ることの利点であると考えられる。この点は、録画の容易なオンライン授業の長所であると言えよう。

3回目の授業は、30分の予定時間を15分超過した。授業者は、「落語の世界を伝えたい気持ちが強く、時間をオーバーしても準備した資料を全部見せたいと思った」。その結果、学生の演技の練習を目的としたグループワークなどに充てる時間がなくなった。授業者がスライドやビデオを見せるなどコンピュータを使った授業に慣れておらず、操作の手際がよくなかったことも時間を失った原因であった。自身の授業ビデオを見ながら、「授業は講義的な部分が多かった。大学だから知識を入れることを重視したけれど、大事なのは演じること。体で感じてもらった方がよかった」と内省した。「後から考えると、もっと大切なことである『演じ方』に絞った方がよかった」と述べ、当初の目的であった学生が小唄を楽しむということが置き去りにされ、授業の焦点が少し外れてしまったとふり返った。小唄を理解し演じること重点を置き、例えば、学生に自分の小唄を選んだ理由を聞いたり、座布団の座り方を指導したりした方がよかったと、今後の授業内容に関する改善案が述べられた。

5.3 国際小唄合同発表会への参加

最後に、国際小唄合同発表会への学生の参加について述べる。2021年6月30日と7月1日に開催された国際小唄合同発表会には、ヨーロッパ8カ国から88人の参加者があった。

3回の授業の終了後、授業者は「学生がちゃんと覚えてくれて、感動的だった。みんな真面目に練習してくれて、嬉しかった」という感想を持った。2回目の授業後に学生が提出した小唄ビデオについて、「みな予想以上に上手だった。学生のビデオの出来が良く、着物を着る、和装らしい衣装にするなど

の工夫もあって、積極的に参加しているようなので、全員が発表会に参加するか」と期待したが、実際に参加を希望した学生は14人中8人であった。

事後のアンケート調査や私信によって、自分の演技を他人に見られたくないと思う学生が何人もいたことがわかった。授業者はこのような学生の気持ちを予想しておらず、戸惑った。今後の小唄指導の活動においては、個々の学生の気持ちにも留意する必要があると言える。

6. おわりに

本稿では、ゲント大学日本学専攻の日本語コースにおける小唄を用いた授業の実践報告を行った。他の教育現場においても小唄授業を試みることができるよう授業の内容について詳細に記述した。授業では、小唄の演技の仕方の指導とともに、小唄や落語に関する背景知識の導入が行われた。3回にわたった小唄授業の到達目標は、学生が小唄の内容や演技の仕方を理解し、実際に小唄を演じてビデオ撮影して提出することと設定され、全ての学生によって達成された。

3回の授業終了後に教師は自身の授業ビデオを見ながら内省を行い、小唄授業の良かった点や改善点を検討した。良かった点としては、授業準備の際に、ワークショップで得た多くの資料を活用できたことが挙げられた。一方で、小唄に関する体系的な知識が不足していたため導入する項目を適切に選択できず周辺的な内容を入れすぎてしまったこと、学生の演技への個別フィードバックや学生によるグループワークなどが時間不足で十分に行えなかったことなどが授業の反省点として挙げられた。教師が各授業の学習目標を見失わないことが重要であると改めて認識された。また、学生の理解状況を推し測るのが難しいオンライン授業では特別な注意が必要である半面、オンライン授業はビデオ録画が容易なため、教師が客観的に授業のふり返りを行う機会が得やすいことが利点であると言える。

教師には、今回の小唄授業では当初の計画から学習の焦点が少しずれてしまったという認識があり、授業の改善案として、学生がより小唄を楽しめるように、小唄の理解や演技に関する内容を授業の中心に据え、指導内容の時間配分を考え直すことが挙げられた。今後、小唄を用いた日本語教育活動を実施する際には、これらの改善案を考慮して行いたいと思う。

注

- (1) オンライン研修会「教師のための小唄ワークショップー学習者による小唄パフォーマンスの指導方法ー」の講師は、米国のパデュー大学とミドルベリー大学日本語学校にて日本語の授業に落語や小唄を採り入れている畑佐一味氏である。
- (2) ヨーロッパの多くの大学では学部が3年制であるため、3年次は最終学年にあたる。
- (3) ゲント大学では3年次後期に多くの学生が日本に留学する予定であったが、新型コロナウイルスによるパンデミックの状況のため留学が中止となった。そのため、予定より多くの学生が小唄授業に参加した。
- (4) 小唄授業の開始時には国際小唄合同発表会が計画中であったため、詳しい参加要領が定まっていなかった。後に参加者の小唄ビデオにお辞儀を入れることが規定されたが、最終的には、お辞儀のない小唄ビデオも受け付けられることになった。
- (5) CEFRのB2修了レベルは中級後半レベルであり、ゲント大学では3年次後期に行う日本留学後にB2レベルに到達することを目標としている。

参考文献

- (1) 国際交流基金関西国際センター (2019) 「やさしい日本語落語『美術館・けんか・ピザ』」
<https://www.youtube.com/watch?v=ZlfuBGTK2Xk> (2022年1月24日)
- (2) 国際小噺合同発表会 (KKGH) (2021) 『国際小噺合同発表会』
<https://sites.google.com/view/kobanashifestival/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0?authuser=0>
(2022年1月24日)
- (3) 国際小噺合同発表会 (KKGH) (2021) 「小噺動画 2021年 イシによる小噺演技『ケンカの原因』」『国際小噺合同発表会』
<https://sites.google.com/view/kobanashifestival/%E3%81%93%E3%81%B0%E3%81%AA%E3%81%97%E5%8B%95%E7%94%BB?authuser=0> (2022年1月24日)
- (4) 誓願寺「安楽庵策伝」<http://www.hiroshima-seiganji.com/about/anrakuan.html> (2022年3月19日)
- (5) (独) 日本文化芸術振興会「落語早わかり」『文化デジタルライブラリー』www2.ntj.jac.go.jp
(2022年1月24日)
- (6) 畑佐一味 (2018) 「日本語学習者用小噺集」『みんなの小噺プロジェクト』
<https://one-taste.org/kobanashi/collection> (2022年3月18日)
- (7) ヒューマンアカデミー「やさしい日本語落語」<https://www.youtube.com/watch?v=OsdIAIAWNhQ&t=314s>
(2022年1月24日)
- (8) 柳家東三楼「RAKUGO in English」https://www.youtube.com/watch?v=FsMzYyk_3dU (2022年1月24日)
- (9) NHK「落語」『NHK for School』
https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150080_00000 (2022年1月24日)
- (10) NHK「落語『じゅげむ』」『NHK for school』
https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150091_00000 (2022年1月24日)